

第一〇章 佐野勝也

鎮西学院中学部入学

敬虔の学び

伝道旅行

寮歌「おもえばゆかし南国の」

一高から東京大学

ハーバード大学留学

九州大学宗教学助教授、教授

友人と弟子

「基督教教理史講話」

佐野勝也

佐野勝也(1888-1946)は熊本県下益城郡小川町に生まれた。一九〇五(M38)年、長崎東山手の鎮西学院中学部に入學し、学院の構内にある寄宿舎に入った。

学院は留學から帰った笹森卯一郎博士が新院長となり、校名が「鎮西学院」と改まる時代の転換・発展期を迎えていた。

### 敬虔の學び

その頃、寄宿生は夕方の祈禱會に出て、さらに寝る前の祈禱會を各室で行っていた。こうして夏前には生涯を伝道者として過そうと決心した者もいた。このよ

うな空氣がみなぎっていたある日、宣教師のスミス先生が祈禱會に来て使徒行伝の話をした。彼の熱心な話に感激した寮生たちは夏休みを利用して昔の使徒がやったように伝道旅行をしようと相談した。

伝道旅行に参加した者は、当時高等科にいた榎本泰治を筆頭に、つぎよし 中学科の伊東平次、米倉次吉、吉田(後の河野)次郎七、松村友雄、それに佐野勝也の六名で



佐野勝也



鎮西学院伝道隊 右から二人目佐野勝也

あった。・・・夏休みで皆が帰省してしまった翌日早朝、旅行支度を整え、校庭の大楠の木の下で秋永先生の司会によって祈祷会を開き、まだ眠りの内にある長崎市を出発した。

佐野は次のように記している。

「伊東君が幻燈器械を持ち私共は幻燈用の附属品それに新約聖書数十冊を携帯した。大村湾に面した大草まで歩いて、それから船に乗った。湖水のような大村湾を船で渡る時は、その昔ガリラヤの湖水をなにか船で渡ったキリストや使徒たちのことを偲しのんだ。大村に着いたら小林矩表くみょう牧師が待つてすべての準備を整えておいてくれた。小林牧師の筆になる広告用の大旗を先頭に押し立て、讚美歌を歌って町中を広告して歩いた。それから夜になると、キリスト一代記の幻燈を映写して各自が説明の任にあたった。」

こうして彼らは一週間ばかり川棚、早岐はしき、武

雄、佐賀などの各町を廻った。暑い夏の日には重い荷物を負って歩き、着いたら直ぐ広告、夜は幻燈の説明というわけで随分疲れた。それでも各地で求道申込者があつたので、彼らの意気はかなりあがつた。・・・ところがそれから二十幾年後の今日となつて見ると、一行六名中、私はついに色々な運命から伝道者とはならないでいるが、他の五名中四名までが(一人は早世)伝道者となり、いづれもメソジスト教会で働いている。・・・このように当時の学院寄宿舎には一種のリバイバル(信仰復興運動)が起つており、伝道者たろうと決心した者も現われていた。しかし、そうした人々が必ずしも伝道者となつたのでなく、むしろ、あの一週間はかなり苦しい伝道旅行をやつた者の大多数が伝道者となつた。」\*1

また、佐野は学生時代に寮歌を作り、それはながく親しまれた。その一節。「思えばゆかし南国の 若草燃ゆる岡の上に 桜かざせる紅の その旗なびく 三千年 四寮にこもる若人の 熱き涙にいのちあり」(以下二、五節を省略)

佐野は一九一〇年、鎮西学院を卒業し、一高から東京大学\*2に進み、宗教学初代教授姉崎正治のもとで学んだ。一九一七年に東京大学を卒業し、アメリカの

ハーバード大学に留学した。ハーバードでは「ユダヤ教」の著者モーア教授のもとで研鑽をつんだ。留学を終えて帰国後、青山学院教授を経て、一九二五年、九州大学に赴任。法文学部に開設された宗教学講座の助教授を経て、翌年初代教授に就任した。

その後、ヨーロッパに留学した。特に、ドイツ人新約学者アドルフ・ダイスマンの影響をうけ、佐野が「靈魂の指導者」と呼ぶダイスマンがイギリスで講義した英語版「イエスとパウロ」(原題は「イエスの宗教とパウロの信仰」)を妻貞子との共訳で一九二六年に出版している。それは二羽の鳥が空を飛んでいるような格調高い訳である。東京大学の宗教学の傾向であった宗教現象を実証する科学的方法から、一步をすすめ、パウロがイエスと出会った体験を重視し、そこからイエスの宗教を解き明かす方法をとった。

学位論文は「使徒パウロの神秘主義」であり、一九三五年に出版された。ゼミでは「ローマ書」のギリシア語原典講読と積義を丁寧に取り上げ、その後カール・バルトの「ローマ書」講読へと進んだ。

佐野は学生たちにパウロから入るようすすめた。この頃始まった聖書のテキスタイル批評はまだ定説を得ていなかったので、史的イエスを確定することは困難で

あると考え、パウロから入ったがよいとすすめたのである。\* 3

さて、先の伝道旅行を共にした米倉次吉は熊本県宇土・不知火町に生まれた。幼くして父の急逝のあと、長崎の親戚の医者の家で見習いをしていった。そこから、鎮西学院に入学し、将来の貿易商を志し、英語を習得しようとしていた。その当時、さきにのべたが、アメリカ帰りの笹森卯一郎博士が院長となり、その熱心なキリスト教教育によって、信仰的な雰囲気は全校にあふれていた。米倉はその校風に感化され、親兄弟の反対を押し切って、一九〇九年、ウエスレー教会で洗礼を受け、キリスト者になった。卒業後熊本で小学校の教師をしていたが、伝道者への思いがやまなかった。

鎮西の神学科は入学生少数のため廃科となったので、関西学院神学部で学び、伝道者となった。米倉は朝鮮の威興へんきんの教会に赴任し、ここで佐野勝也の妹佐野ミシ(美志)と結婚し、佐野とは義兄弟となっている。米倉の長男充は九州大学に入学し、佐野の薫陶を受け、関西学院に勤めた。\* 4 佐野のもとには、後に九州大学の教育学部部長となる石井次郎、後の関西学院神学部教授小林信雄、西南学院教授小桶井滋、そして明治学院教授の村上和男が学んでいる。一九四九年、佐野

は石井次郎と共訳でシュライエルマツヘルの「宗教論」を翻訳出版した。

なお、シュライエルマツヘルは「一九世紀プロテスタント神学の父」といわれる敬虔主義(Pietism)の牧師であり神学者である。ドイツでは、先にルターによる宗教改革のあとに起こった三〇年戦争をとおして国教会が形成された。それは国家と結びついた上からの力を持つルター派正統の国教会であったが、それに対して「闇を照らす内なる光」\*5に導かれる敬虔なる人々の下からの力である「全信徒祭司制」を徹底し、失業窮民、孤児、障害者を奉仕の対象とした、やがては「内国伝道」の「ディアコニー」(キリスト教社会福祉)へと向かう敬虔主義運動が起こった。シュライエルマツヘルはその指導者の一人である。

佐野勝也は鎮西学院で、先にのべた祈祷会、伝道旅行を共にして敬虔なる信仰をもつたこと。彼の研究が敬虔主義の指導者シュライエルマツヘルに向かったこと。彼のもとで石井次郎、小林信雄、米倉充、小樋井滋といった神学者が育てられたこと。若き日のウエスレーがモラヴィアのヘルンフートの人たちと出会って回心を体験したこと、敬虔主義の指導者ツインツェンドルフの感化を受けたこと。そしてウエスレヤンであるC・S・ロングと宣教師達をとおして鎮西学院に流れる敬虔の精神風土。これらはいずれも見えない糸でつながっているように思わ

れる。

## 教会生活

佐野勝也は福岡警固教会\*6で、九州大学の同僚である荒川文六、今中次磨と共に充実した教会生活を送った。それは、警固教会月報「いづみ」、昭和七年から昭和一〇年終刊の四一号までの中に連載された佐野の寄稿にもみられる。「基督教理史講話」、「使徒行伝」、「ローマ書」などが寄稿された。

また家庭で長年にわたり聖書研究会を行い、基督教講演会などの講師を務めた。

ここで、「いづみ」に寄稿された「基督教々理史講話」第一回目の概略を紹介したい。戦争前の日本社会、そのなかの教会また、信仰生活者に向けて、なによりも自分自身にむけて語られる情熱あふれるキリスト教理史、キリスト教がローマ帝国の迫害をとおり、ついにローマ帝国の国家宗教に受け入れられるにいたる。その一端をのぞいてみよう。なお、本稿ではできるだけ現代文に直し、概要を記した。



## 一、キリスト教の思想的背景、一、ギリシヤ、ローマの文化

『神人イエスが、ユダヤのささやかな村に、呱呱こゝろの声をあげたとき、ユダヤはローマ帝国の一属領であつた。キリスト教が発生した時代のギリシヤ、ローマ人の宗教思想を一瞥べつすると、一般民衆の宗教心の特徴は皇帝を神社に祭り、広く民衆の間に感化を及ぼしていた。ローマ人は元来民主的な国民であつて、己と同一な人間に過ぎない皇帝を神として祀まつることは、一般国民の常識の受け入れ得ないところであつた。これに反して、東洋諸国において、国王は同時に神であつた。ゆえに、彼らはローマの皇帝に対しても、自国の皇帝に対すると同一の態度をとつた。この態度がついに、ローマ人の心を動かして、皇帝崇拜を樹立せしめるにいつたのである。

このようなローマ帝国にとつて、キリスト教のローマ侵入は、非常な障壁となつた。そのため、多くのキリスト教徒は猛獣の餌食となつて、コロシウムに血を流さねばならなかつた。だが、皇帝崇拜を中心とする国家的宗教の樹立は、かならずしもキリスト教に対して不利益のみではなかつた。なぜならば、これによつてローマ人の宗教心が統一され、一度キリスト教がローマの皇帝によつて信ぜられるや、たちまちにして、一般民衆に信じられるようになった。<sup>\*7</sup>

ことに国家と宗教とが密接に結合した結果として、後のキリスト教が国家的宗教となるに及んで、国民は容易にキリスト教によつて統一されるに至つた。

キリスト教がローマ帝国内の民衆に受け入れられるための準備となつてくれた第二の要素は、いわゆる東洋の密儀宗教の影響である。

ローマ国家の宗教は国家的、団体的であり、かつ法律的であつた。

これに対して、東洋的密儀宗教は精神的、個人的色彩がつよく、内面的神秘的なものであり、キリスト教の伝道には好都合であつた。

ローマに輸入された東洋密儀宗教とフルギアのアッテス神、ペルシアのミトラ、エチオピアのオシリスなど。ローマ帝国支配下の各地の宗教が輸入された。それらの神々は、いずれも一度死ぬが再び蘇生する神々であつた。神々の死と復活を記念する儀式は、毎年一定の時期に、きわめて華やかに行われた。参加したものは人が神と同化するところの神秘的体験をなし、神と共に死に、神と共によみがえると信じられた。

民間に広まつたこれらの宗教に対し、上流の知識階級を支配したものはストア哲学であつた。ストア哲学の二つの要素は唯物論と汎神論である。

すべては神から出、存在するものはすべて物質的である。存在する限り神も靈

魂もエーテルのような物質的なものと考え。神が全世界を貫通するのであるから、それは必然的に汎神論になる。神は最も精神的なものである。ストアの道徳的理想は自然になつた生活であるが、それは神性に直結した生活である。

ストア哲学の最後にあげられるのは、コスモポリタニズムである。世界の人類は同胞であり、兄弟であるという思想である。ストア哲学の実践の目標は肉体的束縛を脱して理性的成果を営むことにあつた。すべての快樂を捨て、ただ精神に生きようとした。このような態度は、宗教的欲求と相通じる。すべて宗教的精神は、物質世界に対立する靈の世界を求め、これを最高至上のものとする。このような意味でストア哲学は、キリスト教徒的信仰への思想的準備となつたことは否定することはできない。』\*8

教会の歴史には、自分が信じる教理を正統とし、他を異端として排斥する傾向が見られる。国教となり権力を手にするとキリスト教は、ギリシア哲学も、東洋の密儀宗教も、ストアの禁欲主義的实践をもなう哲学も排斥した。しかし、今見たように、佐野のキリスト教教理史は、その反対である。佐野は、これらは自分と異なつていたり対立するものであつてもキリスト教の受容を導く要素である

としている。ここに佐野の学問と人間性の一端が見られる。

とるに足りない小さいことに固執し、自らを正統化し、他を異端とし排斥する傾向は、常にあり、衰退するキリスト教団がたどってきた道である。そうならないためにも、佐野の仕事を再評価し、これからの心の糧とすることができれば、幸甚である。

佐野は、戦後、母校鎮西学院が原爆被爆の痛手により、長崎での教育事業を断念し、諫早の地に移転し、与えられた現在地で、復興にすべてをかけた時、副理事長として尽力を惜しまなかった。

注

\* 1 鎮西学院九十年史、六四三―六四七頁、寮歌については同人頁

\* 2 「一高」は戦前の第一高等学校、「東京大学」は東京帝国大学、「九州大学」は九州帝国大学である。

\* 3 村上和男 [blog.goo.ne.jp/jybunya/e/71ad747305cdf69df4695a37bad5443](http://blog.goo.ne.jp/jybunya/e/71ad747305cdf69df4695a37bad5443)

\* 4 「山路越えて」―米倉次吉―伝道者のあしあと、私家版

\* 5 讃美歌Ⅱ二八番「闇を照らす主よ」は同じ敬虔主義派の指導者ツインツェ

ンドルフの作詞として愛唱されている。

\* 6 当時は福岡組合基督教会

\* 7 紀元三二三年に皇帝コンスタンチヌスの勅令によりキリスト教が容認され、キリスト教迫害は終息し、やがてキリスト教がローマ帝国の国教となったことを指している。

\* 8 「いずみ」 16号、昭和八年六月号。なお福岡警固教会から貴重な資料をいただいたことを記して感謝いたします。

\* 追記 倉田百三は、「子どもの養、教育の資のために母親が犠牲的に働く」例としてブース大将、後藤新平の母と並んで佐野勝也の母を挙げている。「機を織ったり、行商したりして子どもの学資をつくった」。(「青春をいかに生きる」、角川文庫―三〇九―一三〇頁)

写真

・ 佐野勝也 (二頁) は「福岡県百科事典」より西日本新聞社の使用許可を得た。

・ 鎮西学院伝道隊 (三頁) 「鎮西学院九〇年史」より

著書

- イエスとパウロ、A・ダイスマン、佐野勝・佐野貞子訳、大村書店、一九二六
- カントの宗教論、理想社、一九三〇
- 使徒パウロの神秘主義、第一書房、一九三五（学位取得論文）
- 宗教学概論、大村書店、一九三五
- キリスト聖語読本、第一書房、一九三七
- 宗教と人間、第一書房、一九四〇
- 基督教とは何ぞや、惇信堂、一九四六
- 宗教改革と近代精神…ルッターからルツソーへ、惇信堂、一九四六
- キリストへの道…聖書読本、真光社、一九四八
- 宗教論、シュライエルマッヘル、佐野勝也・石井次郎訳、岩波書店、一九四九
- 他